

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	Sugandhi Aishwarya Suresh
論文題目	DIMENSIONS OF EARLY MODERN TRAVEL CULTURE: IN THE WORKS AND LIFE OF THOMAS CORYAT (前近代における旅行文化の諸相―トマス・コリヤットの著述と旅行を手がかりとして)		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士学位申請論文は、近代初期におけるイギリスの旅行家トマス・コリヤットの東方旅行に関して、とりわけその旅行動機と、彼の旅行動機を育んだ特有の文化的状況を論じたものである。コリヤットは、1577年頃、サマセットシャーの牧師の子として生れ、オックスフォード大学に在学した後、17世紀初頭のジェームズ1世期に、一度はヨーロッパ大陸への、また一度は中東地域からシャー・ジャハンギル時代のムガル帝国への旅行を敢行した。通商や外交のためにでもなく、また軍事的・宗教的な目的も有さずに、旅行そのものを目的として長途の旅行を行った最初期の英国人として知られている。</p> <p>ほぼその全行程を徒歩で行った最初のヨーロッパ旅行の体験については、帰国後に刊行した旅行記 <i>Coryates Crudities</i> (以下 <i>Crudities</i>) によって詳しく知ることができるが、二回目のインドまでの旅行は、旅行中に他人に託した原稿が不慮の事故のために失われ、コリヤット自身も同地において客死して事後の旅行記を執筆することがなかったために、それまでにいくらか本国に送った通信を除いて詳細な記録は存在しない。本論文はこれらの記録を、同時代の旅行文学・旅行記録と比較しつつ、コリヤットを冒険に誘ったものが何であったかをつきとめようとしている。</p> <p>論文は第1章の「序文」および第7章「結論と今後の課題」を含む全7章によって構成されている。</p> <p>序文(‘Introduction’)では、1588年のスペインとの海上決戦以降のイギリスの領土拡張主義的な進出と、香料貿易を中心とした対アジア商業活動の活発化を背景とし、とりわけ海外情報の価値がいちじるしく高まり、旅行文学・旅行記録の出版がさかんになっていた時代状況を解説する。</p> <p>第2章‘Beginnings: Travel and Travel Writings’は、コリヤットに東方世界への関心をつのらせるきっかけとなり、また出国にあたって予備的な知識を提供した可能性のある過去の書物を、<i>Crudities</i> のテキストの分析や、蔵書家であったトマスの父親のもとでの家庭における読書体験、また大学における人文主義的教育の検証から、古代の歴史家や地理・地誌学者の書物、中世における東方旅行記類を特定し、とりわけその中でも、ヘロドトスおよびストラボンの重要性について論証している。これは特に、コリヤットの旅行中の行動のなかに、古代遺跡の訪問や計測など、いわゆるアンティークエアニアニズム(古代憧憬)への傾向が顕著にみられることとあわせて重要である。</p> <p>第3章‘Life and Travel of Thomas Coryat’は、コリヤットの経歴と旅行に出発にいたる経緯をあつかうが、とりわけ費用を要する旅行を財政的に援助したと考えられる故郷サマセットにおける有力者とのパトロネジ関係と、ロンドンにおける皇太子ヘンリーの宮廷への参加に焦点をあてている。</p> <p>第4章‘London Wits and the School of Night’は、ロンドンのマーメイド・タヴァンで月例の会合を開き、社交と討論による相互の向上をはかっていた貴族・廷臣、詩人・劇作家らによる文化的サークルと、その前身にあたり、シェイクスピア研究において「夜の学派」として知られる知識人サークルとを扱っている。コリヤットは、中東・インドからの通信の宛先をマーメイド・タヴァンとし、文中でも言及してこの集団への帰属を</p>			

明らかにしている。前身となる「夜の学派」は、無神論的傾向を一部で指弾されることもあった集団であるが、この二つの集団はともにエリザベス朝の有力廷臣ウォルター・ローリーの強い指導・影響のもとにあったと考えられる。そのローリーが、イギリス最初の植民計画であるロアノーク移民の発案、推進者であり、自ら南米ガイアナ探検を実施していることから、これらの団体の秘密会合においても、国境を越える（cross border）活動は共通の関心であったらうとする。

第5章 ‘From Orient to Orientalism: Looking the Other Way’ は、コリヤットの旅行、とりわけ中東・ペルシャ・インドへの旅行に対する評価をめぐり、近年の研究がヘロドトス以来のすべての西方から東方への旅行が、オリエンタリズムを内在させているとみなす見解に傾いており、コリヤットの旅行もつねにその文脈においてのみとらえられているとして、研究動向の批判的なサヴェイを行っている。

第6章 ‘The Grand Tour’ は、コリヤットの大衆旅行が、17～18世紀のイギリスにおいて、有力家系の子弟の教育の最終段階として実施された、フランス・スイス・イタリアへの長期旅行（グランド・トゥアー）の先駆であり、またモデルとなった可能性を論じている。グランド・トゥアーの定義それ自体は、コリヤットの旅行に適用することはできないが、外国語や礼儀作法の実地の習得や、自然の美的観賞、古典古代の歴史・芸術への知識の涵養ということを目的とするグランド・トゥアーは、すでにコリヤットにおいて体現されていたというものであり、コリヤットにとっては上昇のための道具であった旅行が、そのまま踏襲されて上流階級における教育的制度として定着したものとす。

最後に、第7章の「結論」（‘Conclusion’）では、コリヤットの旅行が「大学を途中終了したものが、自分自身のニッチを掘り当てるための作業」であり、そこに「注意深い古代学者、するどい人類学者、あらゆる経験を欲する怖れを知らぬ旅行者を見出すと」とする。

( 続紙 2 )

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文は、旅行者として最初にインドの地を踏んだ、17世紀の英国人旅行家トマス・コリヤットの、二回にわたる国外旅行の、特に旅行動機について論じたものである。コリヤットのヨーロッパ旅行記 *Coryates Cruditiess* (以下 *Crudities*) は、1611年に著者自身によって刊行され、多くの読者を得た。この書の上梓後に出発した中東からインドにいたる旅は、著者の現地での客死によって旅行記としては出版されず、ただ旅行中に本国へ送った通信の一部が、サミュエル・パーチャスによる旅行記集成 *Purchas His Pilgrimage* の1625年版に収録されたのみで、あまり知られることがなかったが、近年、同時代の他の旅行記とともに、エリザベス朝末期以降のイギリスの、拡張主義的・植民地主義的な傾向を反映する文献としてとりあげられることが多い。申請者はそうした研究状況に対し、コリヤット自身の経歴と彼がロンドンの知識人社会においておかれた特殊で固有の状況に、前例のない旅行を敢行した理由と動機を見出すべきであるとした。

申請者が特に重要であるとみなしたのは、彼が書物として吸収した過去における旅行の伝統であり、特に人文主義的教養として習得された古典古代の旅行家による旅行である。*Crudities* そのものは、直接の典拠への言及は少ないが、しかしコリヤットの旅行中の活動には、各地の古代・中世遺跡の訪問や遺構の計測、碑文の転写など、「古代憧憬」に基づくアンティクアリアン的な傾向が著しく見出されることから、古典古代の旅行が、ひとつの内的なモデルとして機能し、その追体験をこころみている点是否定しがたいとするのは重要な指摘である。コリヤット以前に、もっとも影響力のあったアンティクアリアン、ウィリアム・カムデンが、ローマ帝国の属州であった時代のブリタニアを思いつつ、ブリテン島全域を旅行して *Britannia* を著した事例の拡大版であるとみなすこともできる。ただし申請者は、ギリシャの歴史家ヘロドトスの旅行に、コリヤットの旅行ともっとも類縁のものを見出すとしている。

しかし申請者が、旅行動機として論じるのはそうした古代憧憬のみではない。コリヤットの経歴と、彼がロンドンの知識人社会のなかで置かれていた状況そのもののなかにも、彼を未踏の地へとかりたてたものがあるとする。コリヤットは地方の牧師の息子であり、大学に在籍はしたが学位を取得することなく終了して故郷の父親のもとに戻った。父子ともに文学的才能にめぐまれていたようであり、父親の死後に首都ロンドンに出たときには文芸をもって身を立てる意図であったようである。縁故者の紹介によってコリヤットは、皇太子ヘンリーの宮廷に地位を得た。国王ジェームズ1世の第一子であったヘンリーは、早逝したため即位することなく終わったが、俊英として期待が寄せられていた皇太子であり、周囲に多くの有能、多才の人士を集めていた。その皇太子の宮廷で彼は宮廷道化としてその位置を得た。

さらに申請者は、コリヤットが所属したもう一つの知識人サークルについて論じている。これは、ロンドンのマーメイド・タヴァンで定期的に会合をもち、討論と談話による社交的な結びつきをはかっていた主に文学者からなる集団で、ジョン・ダン、ベン・ジョンソンら詩人・劇作家を初めとする、いわゆる「機知の人」(Wits) が結集していた。この集団の前身とみなされるのが、ウォルター・ローリーの「夜の学派」(School of Night) であり、この知識人・哲学者らのサークルが無神論の嫌疑によって危険視されたために、より非公式の会合に移行したものがマーメイド・タヴァンのサークルであったようである。その非公式の性格ゆえ、この集団についてはきわめて資料がとぼしいのが、コリヤットの通信自体がこの集団の存在を証明するきわめて貴重な資料である。

コリヤットがどの時期からこうした会合に出席したかを、申請者は明らかにしてい

ないが、「夜の学派」であれ、マーメイド・タヴァンの会合であれ、チェサピーク湾のロアノーク島への入植事業の発案・推進者であり、自らも南米ガイアナへの遠征を行ったウォルター・ローリーの強い影響下にあったことを考えれば、こうした会合において海外での活動や、海外からの情報が共通の関心事であったことは想像に難くない。かりにそれがなお推測の域を出ないとしても、申請者が、*Crudities* に収録された合計59人という大勢による「頌詩」(panegyrics)に着目した点は慧眼とみなしうる。

友人ベン・ジョンソンが編集し、*Crudities* に付したこれらの「異常」な数のコリヤット称賛の詩編は、これまで単なる文学的儀礼として閑却されてきたが、皇太子の宮廷に伺候する貴頭や、マーメイド・タヴァンに結集する有数の詩人文学者たちが、こぞってコリヤットへ詩を奉呈していることは、いかに彼の旅行が情報として珍重されたかということのみならず、その評価にコリヤット自身がいかに執着したかをも示しており、しかも頌詩の内容からは、彼が「一足の靴による徒歩旅行」などの遊戯的演出を行ったことによって形成された、「道化」のイメージが、そこに再現されていることが明らかであるとしている。コリヤットの旅行動機が、閉じられたサークル内部で自己を印象的に展示し、頭角をあらわすためのアピールの手段であり、その先に皇太子を初めとする有力者のパトロネジの獲得が計算されていたとする所論は説得的である。

コリヤットは、*Crudities* の成功を目撃した後、ただちに第二の旅行に出発した。動機は、さらにいっそうの話題と注目を企図したものであつたらう。しかし、*Crudities* に匹敵する旅行記は書かれなかった。いずれにせよ、ペルシア、インドの旅行においては、*Crudities* の場合のような古代憧憬が行動目的とはならなかったはずである。それに代わるものとして異国趣味を想定することも可能であるが、申請者は、残された通信を見る限り、それはむしろ純粋に知的好奇心に基づいた観察記録といふべきであり、偏見からまぬかれた事実の記述が主体で、オリエンタリストの幻想とは一線を画するものであるとする。

以上のように、申請者は、コリヤットの旅行記録が、人文主義的教養に基づく古代の歴史の追体験、宮廷道化師としてのキャラクターの演出、情報や知識それ自体が評価される知識人集団を対象とした正確で客観的な情報の提供を目的としていたとし、当初の問題設定への解答としている。

行論には推測・推論も多く含まれ、また論理も万全の正確さを欠くうらみはないとはいえないが、同時代の旅行記・旅行文学一般と一括してかたづけることのできない、コリヤットの旅行記録のユニークな価値を明らかにしており、貴重な貢献といえる。

以上のことから、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成26年2月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版事情が許すまで、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降